



scan と read

内田樹の『街場の読書論』（太田出版、2012）を読み始めた。前半は読んだこともない本が採り上げられているので、おもしろくないかなと思っていたのだが、あにはからんや、やはり内田先生の本は面白い。「scan と read」という章の一部を引用してみよう。

＊

読書には少なくとも二つの形態がありうる。一つは「文字を画像情報として入力する作業」、一つは「入力した画像を意味として解読する作業」である。私たちが因習的に「読書」と呼んでいるのは二番目の行程である。

しかし、実際には、画像情報が脳内に入力されていなければ、私たちは文字を読むことができない。007号が二度死ぬように、私たちは言語記号を二度読んでいる。一度目は画像として、二度目は言語記号として。この行程をそれぞれ、scanとreadと言い換えてもよい。新聞を広げて、「斜め読み」しているのはscanである。ふと気になる文字列が「フック」して、眼を戻して、その記事を最初から読むのはreadである。

例えば学校における国語教育はもっぱらreadに焦点化して、その教育プログラムを編成している。「作者はここで何が言いたいのか」とか「『それ』は何を指すのか」とか「『魑魅魍魎』のよみを記せ」とか、そういう問いに答える力のことを「国語力」と呼んでいる。

だが、それでよろしいのか。私はいささか懐疑的である。

それより以前に身に付けていなければならぬscanする力の育成の重要性に日本の国語

教育者は気づいておられるであろうか。

scanとは、単純に言えば、「ひたすら文字を見つめる」ということである。タイピストが意味もわからず手書きの原稿をフルスピードでタイピングするように、文字画像をひたすら大量にかつ高速度で脳内入力する。このscanという予備的行程が適切になされていないと、次のreadの段階には進めない。

その意味で「朝の読書運動」というのはまことに適切なプログラムだったことがわかる。あれは、本を読んでいるのではない。文字を見ているのである。意味なんかどうだってよい。紙に書かれた文字を画像として取り込むという脳内の神経回路のスピードをただ上げているだけである。それが必要なのは、それこそが私たちの教育プログラムにもっとも欠如していたものだからである。

明治までの国語教育の基本は「四書五経の素読」である。素読というのは「ひたすら漢文を音読する」だけである。意味なんかどうだっていいのである。

古人は経験的に、この作業を経由しなければ「言語の意味」を解するという次のレベルにはあがれないことを熟知していたのである。

＊

ふむふむ、これを君たちの古典の授業に当てはめると（こじつけると…笑）、君たちはscanの段階であり、ひたすら音読して暗記せよということである。「暗記」なんてどこにも書いてない？ うん、まあね（笑）。でも、日比谷生は暗記しなさい。漢文などは返り点が目に焼き付くほど音読することだ。